

下野市域周辺の古代の様相

「大宝律令」が制定された頃から、畿内（現在の近畿地方）と連動して地方でも畿内同様の政策推進やインフラの整備など様々な事業が進められます。

下野国では、東山道などの道路網整備や下野国府（栃木市・現在の県庁のような機能）や郡家（現在の市役所や町役場的な機能）の修理や増改築が各地で行われました。

七三〇年代は、下野薬師寺が東国の一氏族である下毛野氏の氏寺から東国随一の規模を誇る公立の大寺院へと大改修が行われた時期でもあります。現在の下野市域周辺の古代の様相を概観すると下野国府が思川の西に設置され、河内郡衙（河内郡の役所）が石橋駅の東に設置されました。現在の市内には東山道が通過し、下野薬師寺、下野国分寺・尼寺が建立されました。わずか50年程度の期間に古代における大規模公共事業が現在の下野市周辺で連綿と行われ、開発による槌音があちこちから聞こえたことでしょう。このような大土木工事は、当時の最先端技術保持者である渡来系の氏族や都から派遣された工人の指揮下で進められました。当時のこの地域は人口も増え続け、他地域からの移住者による大規模な新

興集落が次々とつくられ、著しい発展を遂げました。このような情勢の中、下野国は当地域を選定して下野国分寺・尼寺を建立したわけです。

国分寺・尼寺とは

国分二寺（国分寺と尼寺を指します）は、金光明経の四天王「持国天（東）・广目天（西）・增長天（南）・多聞天（北）」による護国と法華経による滅罪（人の救済）のための經典を収めた寺院（金光明四天王護国之寺・法華滅罪之寺）を全国各地に建立し、仏教の力によって全国が安寧に暮らせるような鎮護国家思想が根幹にあると考えられています。

特に僧寺に建立された七重塔には、特別な金光明最勝王経が安置されました。「造塔は国華」と記されており、変革期の国家が地方に威信を示すモニュメントでもあったと考えられます。国分寺という名称から仏教に関することのみをおこなっていたイメージがありますが、当時の僧は土木技術や、暦、言語、数学、医学、行政関係の知識を習得していました。現在の総合大学のイメージを持っていただくと良いのかもしれません。

また、寺院の建立場所は、「好処」を選び、周辺に人家が無く、自然災害等がおきない適当な場所を選ぶよう示されています。下野国内において良い場所として現在の国分寺地区が選ばれた訳です。

下野市教育委員会 文化課

用語解説

郡家・郡衙……

郡の役所。当時の行政機構は、国（国府）―郡（郡家・郡衙）―里「郷」となり、五十戸をもって一里（郷）とされました。郷ごとに郷家（役所の出先機構）を兼ねた（里長）郷長がいたとされています。

僧寺には金光明最勝王経を尼寺には妙法蓮華経（法華経）を安置しました。これらの教えを学ぶため、僧寺には二〇人の僧と尼寺には一〇人の尼僧がおかれました。

下野国分寺跡南大門推定復元図
東大寺(奈良県)に現存する転写
門(てがいもん・国宝)を参考に
復元しました。

